令和６年度　第１回岐阜県生涯学習審議会　議事録要旨

１　日時

令和６年８月５日（月）１４：００～１６：４０

２　場所

岐阜県庁３階　３０３会議室

３　出席者

委員の現在数１３人　出席者１１人

＜委員＞

委員	浅野	欽一郎
委員	浅野	教史
委員	井上	吉博
委員	衣斐	淳美
委員	奥村	佳子
委員	小林	由紀子
委員	小山	真紀
委員	髙橋	幸平
委員	野原	徹二
委員	堀江	弘美
委員	米原	木ノ実

＜事務局＞

環境生活部	次長	西　千代美
県民生活課	課長	森　信輔
	生涯学習企画監	安藤　由美子
	課長補佐兼係長	片岡　留美
	主査	竹内　洋平

４　報告

（１）令和６年度の生涯学習関連事業について

事 務 局：事業について説明

小山委員：生涯学習講座の資料について、膨大な量をPDFで掲載してもなかなか見ないと思う。県民にとって検索性の高い情報公開の在り方を検討できないか。

事 務 局：生涯学習講座の調査結果は、市町村が講座開設するときの参考として公開している。しかし、今後より見やすいものにするための検討をしたい。

小山委員：ダウンロード数、アクセス件数を調べることはできるか。

事 務 局：調べることはできる。

小山委員：多ければ利用されているということであるが、少なければ改善が必要であると思う。

髙橋会長：事務局においては、情報公開の在り方について検討をお願いしたい。

５　議事

地域づくり型生涯学習を通した学びと活動の循環づくりの実践について

実践発表①「時代に即応する「生涯学習の手法」で行う環境教育」をテーマに実践発表（小林委員）

髙橋会長：　小林委員の発表をうけて、各委員よりご意見をたまわりたい。

浅野教史委員：　学生、社会人の世代がなかなか講座を受けられないとのことであった。この世代が講座に参加するためのきっかけ作りは難しいか。

小林委員：　やはり忙しいということがある。しかし、夏休みの宿題など、できるところからやるようにしている。親子での物作りはとても楽しそうである。

浅野教史委員：　子どもや高齢者は、講座を受講するきっかけを得る機会はあるが、忙しい世代の方がきっかけとなる情報をどう得るのか。やはりそのきっかけを作っていくことが必要であると感じる。

小林委員：　きっかけは何でも良いと思う。新聞やニュースなどで疑問になったことをお互いに聞いてもらうことでもいいので、まずは興味をもってもらいたい。

小山委員：　大変精力的に活動されているが、活動は一人で行っているか。

小林委員：　学校教育活動は自分ともう一人で活動しており、休日の講座は他のメンバーも参加している。

小山委員：　今後を担える人が育っていくと良い。学校での取組みは継続的になっているが、そこで学んだ人がその後どう積み上げていくのかも重要である。

小林委員：　小・中学生で環境教育の最初の一歩を作っているが、高校生以上は関わることができず、どうしても個人任せになってしまう。個人の興味の有無で違ってしまい、積み上げまでできないことが悩みである。岐阜市で公民館の講座を開いているが、年間１０講座行っても、１カ所につき５年に１度しか開催できない。自分たち以外でも講座を開いてもらうようお願いするが、環境教育に費用が付かず、環境カウンセラーはボランティアの活動が多いので難しいのが現状である。

野原委員：　環境教育を通して、子どもたちに生きていく力を身につけさせていると思う。小林委員の講座では、目的を先生方と共有し、子どもたちに気づきを与えることを大切にしており、子どもたちに環境との向き合い方や生活の仕方を考えさせていて良い取組みである。市でも学校で学んだ子どもたちが、いかに気づきを得て次世代に向かうかを大切にしている。

堀江委員：　生涯学習において、「なぜ」という疑問が学びのきっかけになるということを教えていただいた。実際に家庭でも、子どもたちはわくわくしたことは覚えていて、次はこうしたいと思うようになる。

米原委員：　環境教育は体験と知識の両方が大切で、どちらかがないと定着しないということが心に残った。また、授業や講座は目的を共有するための打合せが成功の秘訣であるということが参考になった。

奥村委員：　環境問題という大きいテーマに対して、相手のニーズに合わせて題材を工夫している。大人には「得する」という言葉を使うなど、各世代に興味持ってもらうための言葉の使い方がうまいと思った。小林委員は活動量が多く、現場をよく知っている。環境問題は難しい問題ではなく、身近な問題であるという、気づきのチャンネルを合わせてくれる存在が小林委員であり、そのような方の存在が大切である。

衣斐委員：　社会教育においても、学ぶ世代や対象に偏りができてしまうことが課題である。学校で多くの世代が一堂に参加することが一番良いのかもしれないが、保護者の関心の度合いで変わってくる。主催者が投げかけるテーマなどで関心が変わってくることが分かったので、地域の活動につなげていく。

井上委員：　一番の人気の講座、ワークショップはなにか。

小林委員：　ソーラーカーの講座が大変人気であった。子どもたちには、ソーラーパネルが地球温暖化防止につながることを教えた。また、子どもは色の変化など何かが変化することや、自由に工作することが好きであるので、そこに科学的な要素を入れるよう工夫している。全体的に、やはり経費がかかる講座は人気である。

浅野欽一郎委員：　NPO という立場で、授業や講座は依頼があって行うのか。また、運営はどうしているのか。

小林委員：　まずは依頼があってから開催し、その後継続的に講座を開くために委託される場合がある。NPO の財政は厳しいので、基金なども活用し運営している。

高橋会長：　体験と知識の両輪を大切にされているということで、これは生涯学習においてとても大切なことである。継続的な取組みとなるよう、予算措置も含め市町村等いろいろな主体と連携していくことが必要である。

実践発表②「若者が戻り、住み続けられる街へ」をテーマに実践発表（浅野欽一郎委員）

髙橋会長：　浅野欽一郎委員の発表をうけて、各委員よりご意見をたまわりたい。

井上委員：　広報誌だけでなく SNS で情報を発信しているということだが、違いはどのようか。また、どんな方が見ていて、反応はどうか。

浅野欽一郎委員：　広報誌では、地元にいるからこそ書ける内容を取り上げており、関市へ移住を考えている方にとって街の雰囲気を知る参考となっている。また、関市から外に出ていった人にとっては、関市の現状を知ることができるので、楽しみにしている人もいる。しかし、広告に頼らないと持続可能ではないため、金銭的な面などで難しい部分があった。SNS での情報発信にシフトすることで、情報発信に関わるスタッフの人数や時間を削減できた。協賛してくださっている企業も、WEB で発信している。また高校生等若者と団体をつなぐツールとして、SNS は大変有効である。

衣斐委員：　揖斐川町では、ジモト大学の取組みを現在は行っていない。関市では、継続的に地域の人との関わりが深まるジモト大学があることはとても良い。ジモト大学を通してこんなメリットがあったという具体的な事例を教えてほしい。

浅野欽一郎委員：　とある地元企業は、ジモト大学を通して高校生と密な関係ができ、その企業の商品のことが大好きな生徒が採用された。ジモト大学で企業と高校生が密に関わることで、濃いつながりができている。また、高校生にとって地元にある産業や仕事を知るきっかけとなり、将来的に地元に帰ってくるときの参考になればと考えている。将来的には、地域と学校が協働するためのカリキュラムにつながっていけばと考えている。

奥村委員：　商工会の仕事をする中で、地域内への発信だけでなく、地域外への発信を多くする必要があると感じている。他地域の人がその地域に興味を持っている場合があり、そこに新しい気づきがあるのではないか。地域内では当たり前に思っていることが、他地域では高い関心があることもある。商工会もまちづくりの団体も、地域の活性化のために、つなぎ役として何ができるか模索しているという悩みが共通している。団体の長所を強く発信する中で、商工会と連携できる部分もあるのではないかと思う。

小林委員：　関市の良いところを他地域にも発信してほしい。また関市内でも、子どもや青年にももっとアピールすることで、新たな気づきにつながると思う。

米原委員：　関市に行くと高校生がたくさんいるので、若者離れの事実があることを知らなかった。意外と外からよく見えていることに気づいていない場合がある。Ｕターンへの取組みをされているが、Ｉターンへの取組みも必要ではないか。

浅野欽一郎委員：　街として、今はＩターンに舵を切っていないと感じている。しかし、Ｉターン施策をしながら気づく魅力もあると思う。地域の外に向けても活動する中で、新たな活動につながるかもしれないと感じた。

堀江委員：　岐阜市在住だが、自分の地域は人口も若者も多い。しかしそれぞれの世代をつなぐことの難しさを感じている。大人の関係性が良くて、大人が楽しんでいることが魅力であり、それを子どもたちが見ている。人とのつながりづくりがまちづくりだと思っている。

野原委員：　行政からだけでなく、地域の方々がまちの課題に取り組んでいるところが素敵である。また、NPO の若い力が大きな力となっている。今後の地域づくりの参考としたい。

小山委員：　課題として組織の属人化をあげられたが、それはどこもが抱えている問題である。いろいろな事業を紹介してもらったが、その効果はどうか。

浅野欽一郎委員：　団体に若い職員が入ってきたことがまずはその効果と思っているが、数値としての指標が取りづらくはっきりとは言えない。

小山委員：　ゴールはどこか、またゴールへの設計はどうか、そして実際にできているのかを検証することが大切である。検証には様々な方法があるので、評価を可視化することによって、より取組みやすくなる。

浅野欽一郎委員：　重要度が高いことは何かを探るためにも指標を作りたいが、そのノウハウがなく、どんなアンケートを作ったら良いのかなど分からない現状がある。ぜひ専門の方々と連携を取りながら進めたい。

浅野教史委員：　生涯学習には、学び方の学習という要素もあると考えている。地元の魅力を知り、将来やりたいことが地元にあるということを、子どもの頃から学ぶ仕組みがあることが良いと思う。一度外に出た若者も、外から関市を見たときに、より関市の魅力に気づくことができる。子どもの頃に地元のことを知るきっかけがないと戻るきっかけもない。大学での活動を通して、地域との協働を学んだ若者が、現在団体でまちづくりや生涯学習の実践をしていることは大きな意味があると思う。

髙橋会長：　関市にある団体として、協賛してくださる地元企業や個人の会員さんと一緒に、まちづくりのために活動されていることが良く分かった。また、関市で学んだ若者が、大学などでたくさんのことを学んだ後に故郷に帰ってきて、地域づくりに携わることは、持続可能な社会を形成するうえで素晴らしいことである。

実践発表③「防災の人材育成と活躍の場づくり」をテーマに実践発表（小山委員）

髙橋会長：　小山委員の発表をうけて、各委員よりご意見をたまわりたい。

浅野教史委員：　防災は、いざというとき慌てる分野であり、日ごろから考えておかないといけない。げんさい未来塾に志の高い人が集まって、防災への意識を深めていく活動は大変意味がある。多くの人が防災への意識を高めるためには、地道なアピールが必要であると感じた。

野原委員：　本巣市では、中学生を対象とした防災リーダー養成講座を開催しており、そこに自ら参加する生徒がいる。受講が目的ではなく、どう活動につなげていくかということで、中学生が自治会の会合に参画するなど、未来のリーダーの育成が大切である。防災士の資格をもった方々が活躍できる場を作ることで、地域づくりにもつなげたい。

堀江委員：　学校では、地域巻き込み型の防災教育を実施していたが、コロナ禍で途絶えてしまったので、復活させるよう PTA で計画を練っている。防災の学習は楽しいだけじゃないので、重要なことをどう伝えるのかということを考えている。また防災士の資格を取るためには、どこで受講すると良いか調べているところである。

米原委員：　げんさい未来塾の男女年齢構成において、３０代、６０代は女性が多いことに驚いた。子ども会の役員をしていたころ、防災意識の高い自治会長さ

んがいらっしゃったことを思い出し、そのような人材は大切だと思った。

小林委員：　気候変動の授業をしているが、その中にハザードマップの活用方法等を入れている。学校からは、環境学習と防災学習を一緒に学ぶことで、よりどちらの意識も高まるので、連携ができていると良いという意見があった。地域の防災リーダーの方の中には、現代の気候変動について理解していない方もいる。子どもたちにとってより身になるよう、環境・防災・減災を体系的に学ぶことできるカリキュラムの作成も必要である。また、町内会等で行う防災講座でも、さらに工夫できるのではないかと思う。

小山委員：　げんさい未来塾のリーダー養成講座においても、気候変動の内容を盛り込んでいる。また、地域の方に入っていただいて、困りごとなどを共有し、相互理解に努めるよう工夫している。

奥村委員：　人材育成の目的を明確にすると、求めるものが多くなりがちであるが、受講者の考えに合わせることや、無理強いをせず寄り添う姿勢が大切であることが分かった。また、災害はいつ起こるか分からないものだが、いざというときのために連携するためのメーリングリストは良いと思った。防災を考えることは日常を考えることであり、未来を考えることにつながる。減災・防災を学ぶことは地域づくりに直結する。女性や子どもたちが、もっと気軽に防災への取組みに参加して良いと思う。

衣斐委員：　揖斐川町でも、過去に防災士の資格を取った方々にもう一度集まっていただき、その方々をつなげようとしている。中高生の人材育成に力を入れているが、大勢を伴走するときには、どこをゴールにするかが重要であり、ルーブリックという評価方法は良いと思った。

井上委員：　げんさい未来塾への応募者は毎年どれくらいいるのか。また、時世によって応募数に波はあるのか。

小山委員：　毎年３～１０人程度応募があり、各個人のご都合に合わせて応募されているため、時世に合わせて応募数が増減するわけではない。

浅野欽一郎委員：　職業と防災の関わりについて、より専門的な知識をもって地域に還元してもらえるよう、消防関係の方々にもっと防災を学んでいただくというアプローチもあるのではないか。

小山委員：　消防士は一定の条件を満たし申請すれば防災士の資格を得ることができる。しかし、防災士が必ずしもその地域の防災に詳しいということではなく、より地域の実情にあった防災の取組みができるかというと、そうでもない。げんさい未来塾では、地域の防災活動に熱心な方を広く受け入れている。消防士だからとか、自治会のあて職だからとかという理由で防災を学びに来ると、多様性がなくなってしまう。熱意のある方に来ていただいて、職業も年齢も様々な方々で共に学んでいただくことが大事。

高橋会長：　生涯学習と防災とは密接なつながりがある。また、防災の学習は学校教育

とも連携していかなければならない。

〔以後、事務局に司会進行を戻す〕